『宮島土産』顛末記

吉海直人

一、発端

「一九の珍しい揃い本がありますよ」。そう言って馴染みの古本屋の主人が奥から出してきたのが、『宮島土産』全七冊であった。近世文学の専門家ではない私の乏しい知識では、確か一九の『続膝栗毛』の中に『宮島詣』があった。しかしあれはそんなに大部ではなかったはずだと思いながらも、咄嗟のことではあるし、値段もそう高くはなかったので、詳しく調べることもせず、勧められるままに購入することにしてしまった。

研究室へ持ち帰ってよく見てみると、なんと作者は「十返舎一九」ではなく、似て非なる「十方舎一丸」とあることに気が付いた。「しまった」と自分の軽率さをののしりながらも、とりあえず習慣的に「国書総目録」（岩波書店）をめくってみた。すると、

宮島土産　六冊　十方舎一丸作・画　嘉永四年刊
京都府（一冊）・三原（初編上・下、二冊）

とだけあって、わずかに京都府立総合資料館と三原市立図書館の二箇所しか所蔵機関が掲載されていないではないか。また「国書」には六冊（揃い）とあるにもかかわらず、京都府立総合資料館は一冊、三原市立図書館は二冊となっており、どうやら揃いで所蔵している所はなさそうである。少し希望が湧いてきたので、続いて「古典籍総合目録」（岩波書店）を調べてみたところ、

玉川大（一冊）

と、玉川大学が一件追加されているだけであった。しかもこれも一冊のみの所蔵であり、この時点で全冊揃って所蔵している所はないことになる。加えて「国書」や「目録」では六冊となっているが、今回入手したものは一冊多い七冊である。「多少虫損は存するけれども、もしかしたらいい買い物をしたかも」と思いなおしつつ、もう少し詳しく調べてみることにした。

二、展開

そもそも「国書」や「目録」に所蔵記載がほとんどないということは、『宮島土産』がローカルかつマイナーな作品ということである。つまり必ずしも稀少なのではなく、図書館や研究者が熱心に購入していないというだけのことかもしれない。そこで『日本古典文学大辞典』（岩波書店）に当たってみたところ、ちゃんと「宮島土産」項が出ているではないか。辞典に立項されているのだから、まったく無名の作品というわけではなさそうである。そこには、

宮島土産　初編二冊・二編二冊・三編二冊・初編拾遺一冊。滑稽本。十方舎一丸作・画。嘉永四年（一八五一）刊。角書に「滑稽道中」とあり、十返舎一九の弟子を称する広島出自らしき一丸の宮島見物を主題とする膝栗毛である。

と記されていた。弥次郎兵衛の甥の太九郎兵衛と北八の同腹異父弟の鉄七が主人公という趣向であり、やはり東海道中膝栗毛のパロディ作品だったわけだ。[1]

しかもこの説明では、「六冊」ではなく「七冊」となっているので、担当された横山氏が七冊揃いの本を見て執筆しておられることは明らかである。ではその揃い本は、一体どこに所蔵されているのであろうか。

問題の「諸本」に関しては、次のように説明されていた。

大阪河内屋茂兵衛ら江戸・長州・広島六書肆連名（初編）、同五書肆連名（三編）の初版本と、広島世並屋伊兵衛ほか二書肆連名の後刷本がある。三編は嘉永五年刊か。

どうやら初版本と後刷本の刊記に相違（書肆の異同）があるらしい。ということは、横山氏はその両方の本を見ておられるのであろう。いずれにせよ後刷本があるということで、多少は需要があったことが証明された。

ただここには、初版本の所蔵者も後刷本の所蔵者も明記されていない。しかも二編と初編拾遺については書肆の説明もされていないので、ひょっとすると初版本は揃っていないのかもし

れない。最後の「三編は嘉永五年刊か」という疑問を残した記述もひっかかる。三編は初版本があるようだが、その末尾に刊年は記されていないのであろうか。また後刷本には刊記が付いていないのだろうか。

三、横山氏の御研究

他に何か参考になるような研究文献はないかと思い、真っ先に国文学研究資料館のデータベースで論文を検索してみたところ、

・高橋修三氏「資料紹介―「滑稽道中宮島みやげ」」宮島の歴史と民俗7・平成2年3月

・横山邦治氏「翻刻『滑稽道中宮島土産』」『近世・近代文学の形成と展開』（和泉書院）平成9年11月

の二点がヒットした。まことに便利な世の中になったものである。

最初の「宮島の歴史と民俗」は、宮島町立宮島歴史民俗資料館の定期刊行物である。ここでは初編・二遍の翻刻がなされており、解説には福田道憲氏が七冊所蔵されていること、また宮島歴史民俗資料館に初編上下が所蔵されていることが記されていた。

次のものは、辞書項目を執筆されている横山氏が翻刻されたものである。どうやら横山氏が『宮島土産』の唯一の研究者らしい（ただし何故か高橋氏の紹介には言及されていない）。そこでその解題を参照してみたところ、後刷本七冊は広島大学文学部国語学国文学研究室所蔵であることが判明した。初版本の方はやや複雑で、三人の所蔵者が、

林美一氏蔵　初編下（一冊）・二編上下（二冊）
　　三編上、下（二冊）
下垣内和人氏蔵　初編下（一冊）
　　三編上（二冊）、下（一冊）
横山邦治氏蔵　初編上（一冊）

をそれぞれバラバラに所蔵しておられるらしい。これを合わせれば、取り合わせではあるがどうにか全体をカバーすることができることになる。これによって当初の疑問はほとんど解消された。と同時に、今回入手した本への期待度は逆にかなり減少してしまった。

それはさておき、現在においても『宮島土産』の諸本が稀少であることは間違いあるまい。というよりも、宮島の郷土資料[2]

として翻刻されているのであるから、やはりマイナーであるが故に研究が遅れ、そのために諸本の存在も報告されていないと考えられる。とりあえずは、七冊揃いの本がもう一セット出現したことを素直に喜んでおこう。次の問題は、これが初版本か後刷本かということである。

四、影月堂本の書誌

横山氏の解題を参照しつつ、影月堂本の特徴的な書誌を簡単に記しておく。まず表紙の色であるが、横山氏によれば初版は赤褐色地、後刷は黄色地とのことである。影月堂本は、三編二冊のみが赤褐色地であり、他はすべて黄色地となっている。また三編には、林氏蔵本と同じく熊手に菅笠の絵模様があるので、初版の条件を整えていることになる。二編については、林氏蔵本には猿の夫婦の杯事の絵と添書[3]があるとのことであるが、影月堂本にはそれがなく単なる副題簽になっている。黄色地であることも勘案すると、後刷の条件を満たしていることになる。そうなると、揃いとはいっても、取り合わせ本ということになる。

題簽はそれぞれ「滑稽道中宮島美也毛初編上」・「滑稽道中宮嶋みや計初編下」、「滑稽宮嶋土産二編上（下）」、「滑稽宮嶋土産三編上（下）」、「滑稽道中宮嶋土産」となっており、横山氏の解題にほぼ等しい。ただ最後の拾遺に関しては、題簽に「拾遺」という記載はない。

続いて問題の絵題簽であるが、横山氏は「それぞれ編によって異なった絵題簽が付いていたようであるが、今は全てを明らかにし得ない。手元にある本では大方剥落しているからである」と述べておられる。広島大学本は絵題簽が剥落しているらしい。幸い影月堂本には、ほぼ完全な形で絵題簽が付いている（三編下のみかなり擦れている）。

ちなみに初編上には女性二人が描かれており、「アノネ宮じまみやげトカケテなあにあげるよ北むきのふぐ心はよくあたります」という添書がある。下には男性二人が描かれており、「〈最初の一行判読できず〉てめへ新板の宮じまみやげといふ物を見たかソリヤアやうじかイヤちがつたエ、またうそだろふナアニ本だ〳〵」という添書がある。二編には絵がなく、青色の子持枠題簽に「滑稽道中宮嶋土産第二編上巻（下巻）」とある。三編上には錦帯橋が描かれており、「岩国のきんたい橋トカケテ尾篭ながら女の股ぐらトとく心は中のあしがない」と添書さ

れている。下には漁師と牡蛎が描かれており、やはり謎かけで「広島の名物トカケテ近しい中のへだて心はかきが第一じや」と添書されている。拾遺には大黒と鼠が描かれており、「サア〳〵初へんのあまりものに福をそへてやるぞ皆かふたり〳〵」という添書がある。

五、影月堂本の位置付け

本の構成に関しては、末尾部分に異同が存しているようである。まず初編下の末尾には、林氏蔵本と同様に跋文と広告刊記が三丁分存しており、影月堂本は刊記が重複していることになる。しかも二十六丁裏の刊記では嘉永四年正月となっているが、裏見返しには嘉永亥之初冬（四年十月）とあり、表記にズレが生じている。次に二編下には跋文が一丁分存している。その跋には辛亥皐月（五月）とあり、刊記には嘉永亥之初冬とある。この刊記部分は、初編の裏見返しと全く同じでものであった。やはり影月堂本の初編は初版ではなく、二編刊行の際に二編の刊記を付けて再版された後刷本であろう。

続いて三編下には跋が一丁分存しており、その末尾に壬子之睦月（五年正月）とあり、刊記の嘉永四年壬子正月とは一年のズレがある。そもそも壬子は嘉永五年であるから、この四年は本来五年となければならないはずである。横山氏が辞書の説明で「三編は嘉永五年刊か」とされたのは、この相違から推測されたのであろうか。最後の拾遺に跋はなく、刊記には嘉永壬子仲春（五年二月）とある。これによれば、拾遺が三編刊行後の続編であることは明らかである。

ところで本書の刊年に関して、前述の高橋氏は、

初編上巻・下巻が嘉永四年一月、同拾遺が五年二月、二遍上巻が四年六月、同下巻が四年十月、三編上巻が四年六月、同下巻が五年一月

と述べておられるが、ことはそう単純ではない。そもそも上巻に刊記はないので、これは序文の記述を刊年とされているのであろう。しかも高橋氏の解題では、福田氏所蔵本が初版本なのか再版本なのかには一切触れておられないので、こういった問題は生じなかったのであろう。

見返しの絵にもかなり異同がある。後刷本の初編上の見返しは、影月堂本では拾遺の見返しに用いられており、後刷本の二編上の見返しが、影月堂本の初編上に用いられている。影月堂本二編（上下）の見返しは、林氏蔵本の見返しと同様らしい

（ただし林本の二編下にも見返しがあるか否かは未詳）。なお後刷本拾遺の見返しは、影月堂本には見えないものである。

どうやら広島大学蔵の後刷本には、刊年が一切記されていないらしい。それに対して影月堂本は、全てに刊年が記されている（福田本にもあるようだ）。ただし影月堂本は初編の刊記・二編の絵簽題に関して初版本とは相違しているようなので、初版本と後刷本の中間に位置するものと見ておきたい。[4] 残念ながらこれ以上の詳細な検討は、他の揃い本と比較しない限り無理のようである。

六、影月堂本の影印紹介（部分）

横山氏の翻刻には、挿絵はすべて図版で掲載されているものの、表紙が掲載されていないのが残念である（高橋氏の翻刻も同様）。また後刷本に存しない跋・広告・刊記も、資料的価値が十分存すると思われるので、ここに影月堂本の表紙・見返し・序跋・末尾広告・刊記部分を影印で抄出紹介することにする。影月堂本は必ずしも最善本というわけではないが、後刷本にない情報を兼備した揃い本であり、部分的であるにせよ影印で掲載する価値は十分にあると思われる。

最後に、初編下巻の末尾広告に「四編二巻」が、三編下巻に「四編五編」が、初編拾遺に同じく「四編五編」が続出として掲載されている点を課題として指摘しておきたい。果たして四編と五編は刊行されたのであろうか。[5] もし刊行されているのであれば、『宮島土産』の揃いは七冊ではなく十一冊くらいになる。今後複数の諸本が出現・紹介されることを期待したい。

〔注〕

（1）一九自身、『東海道中膝栗毛』（十八冊）の続編として『続膝栗毛』（二十五冊）を出しているし、さらに『続々膝栗毛』も続いている。そのパロディも続出し、日本中を旅行させている。そして明治三年の仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』に至っては、外国旅行にまで発展しているのである。

（2）もともと彫工は広島の山口宗五郎であり、広島中島本町の世並屋伊兵衛と播磨屋町の井筒屋忠八（郎）の二書肆による地方版であった。そのことは二編上の見返しに「広島両書房合梓」とあり、また三編上の見返しに「広陵両書舗合梓」とあることからも察せられる。初編上と拾遺の見返しに「文藻求古両書房合梓」とあるのも同様のことであろう（文藻堂・求古堂は各書肆の屋号と思われる）。作者の一丸も「浪速十方舎一丸」とはあ

るものの、広島（安芸）出身とされている。なお宮島に関する記述は、天保十三年に刊行された『厳島名所図絵』を下敷きにしているらしい。また宮島へ渡る船の船頭は安芸方言でしゃべっており、近世末期における広島方言資料としても貴重かもしれない。

（3）林氏の本の二編上には、「宮嶋みやげ二編目の祝いに猿ども神酒をてうだいなしてさてもよふた〳〵ア、顔がまっ白になった」という添書があるとのことである。当然下の方にも絵題簽と添書があるはずだが、それについては何も述べられていない。

（4）影月堂本の二編上巻十七丁には、奇妙な重複が存している。十七丁の次がまた十七丁となっているのである。しかも単なる同じ丁の重複ではない。十七丁表の挿絵は重複しているものの、後者の裏は挿絵ではなく、続く十八丁表の本文と重複しているからである。これは単純な綴じ誤りではありえないし、また刷り誤りとも考えにくい。横山氏の解題には触れられていないので、広島大学蔵本には重複はないのであろう。初版本がどうなっているのかもわからないが、仮に初版本すべてにかかわる誤りであれば興味深い。

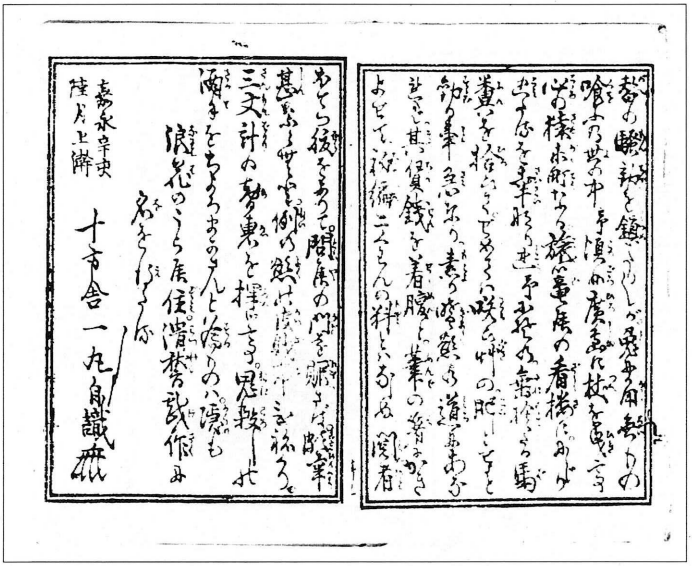
（5）初編の初版本の刊記には、広島の二書肆以外に江戸の須原屋茂兵衛・岡田屋嘉七と、大阪の秋田屋太右衛門・河内屋茂兵衛、さらに山口の山城屋孫十郎の名が出ているので、江戸・大阪・山口でも売られたのであろう。しかし二編では山城屋の名が消え、三編では須原屋の名が消えている。そして後刷本では江戸の書肆が二つとも消え、大阪も藤屋九兵衛一軒に変更・縮小している。そうなると四編五編は、売れる見込みがないということで上梓されなかった可能性も大きくなる。

〈影印抄出〉『宮島土産』

1　初編上表紙

2　初編上見返し

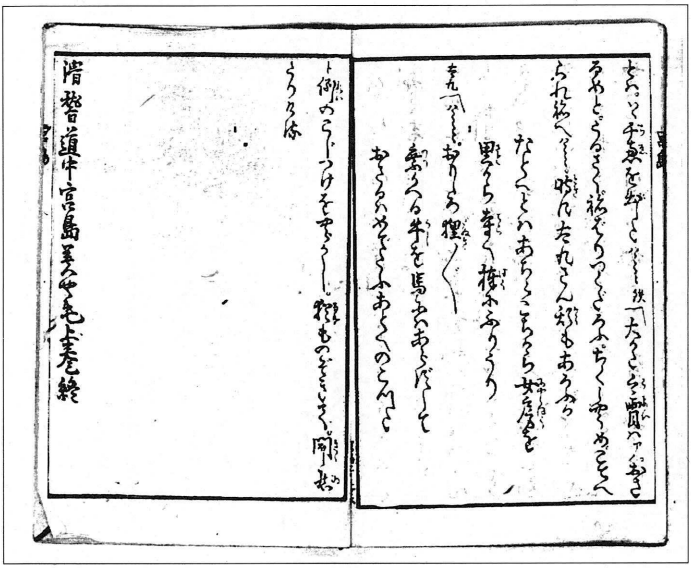
3 初編上序



4 初編上附言

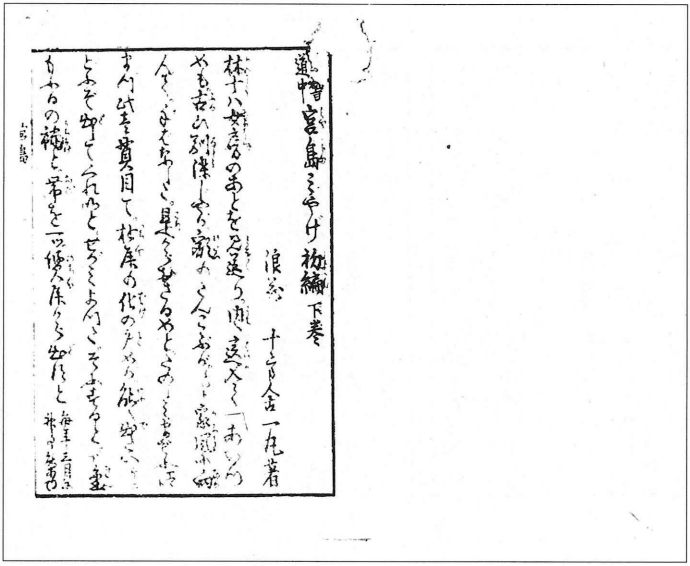
5　初編上作者口上

6　初編上巻末

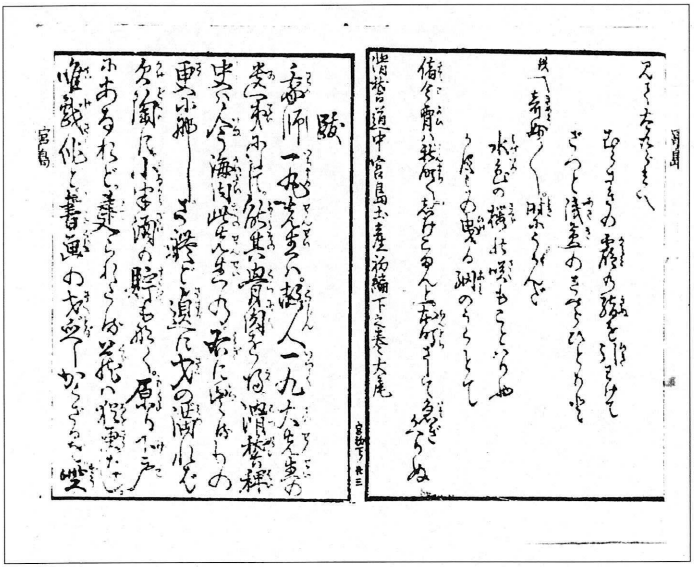


7 初編下表紙

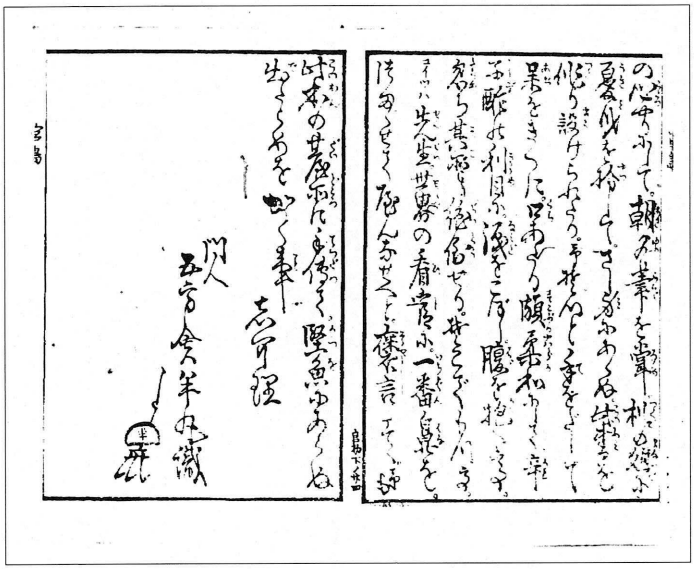
8 初編下冒頭



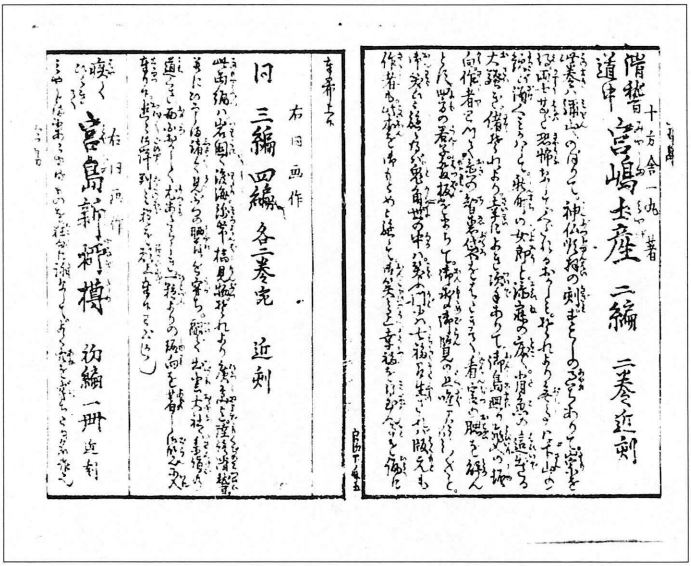
9 初編下末尾



10 初編下跋

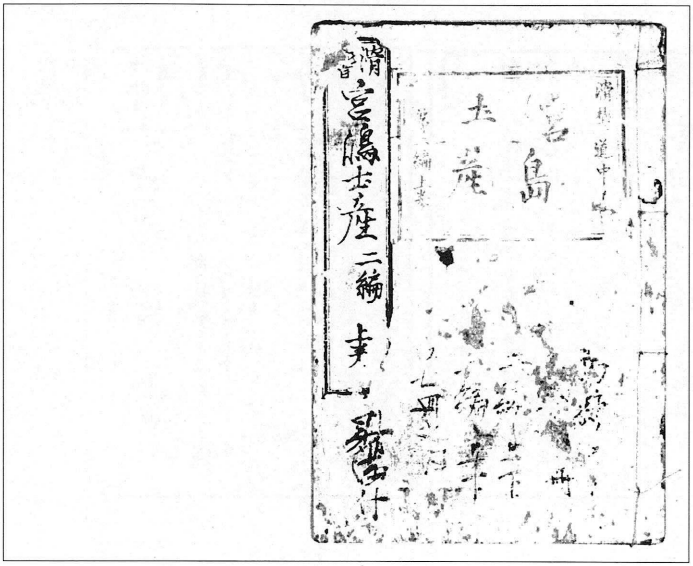


11 初編下広告

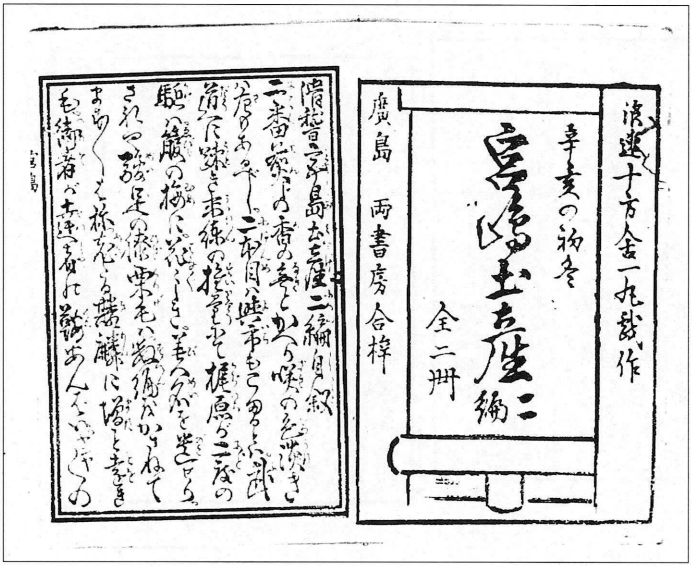


12 初編下刊記

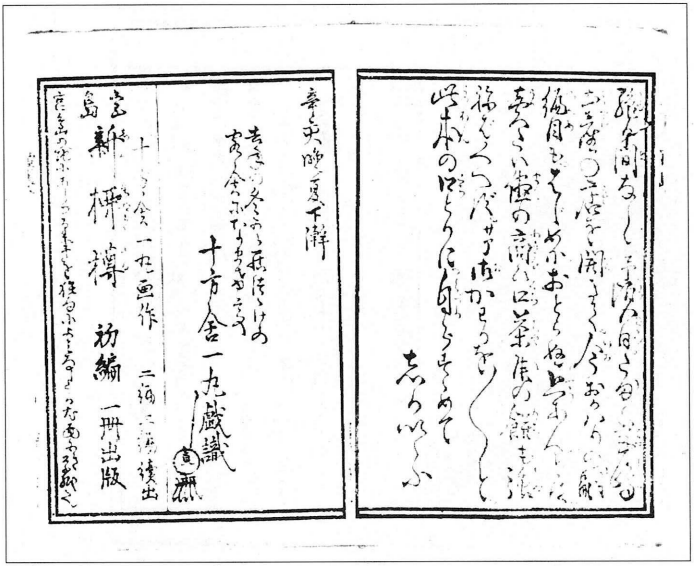
13　二編上表紙



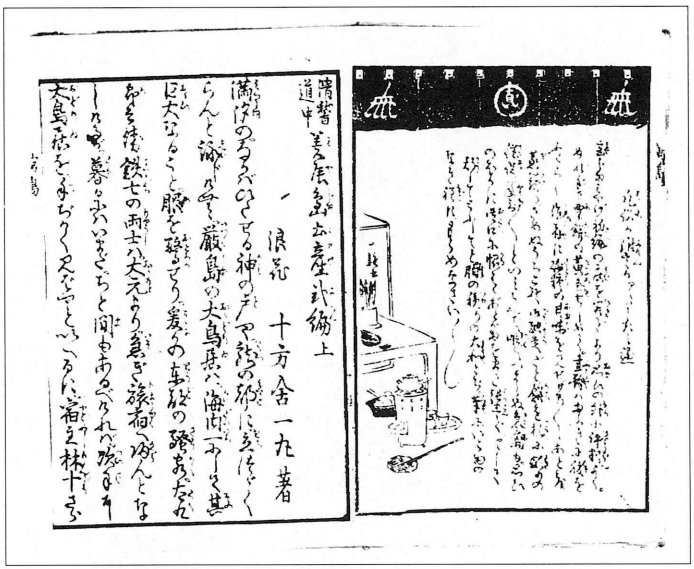
14　二編上見返し



15 二編上自序

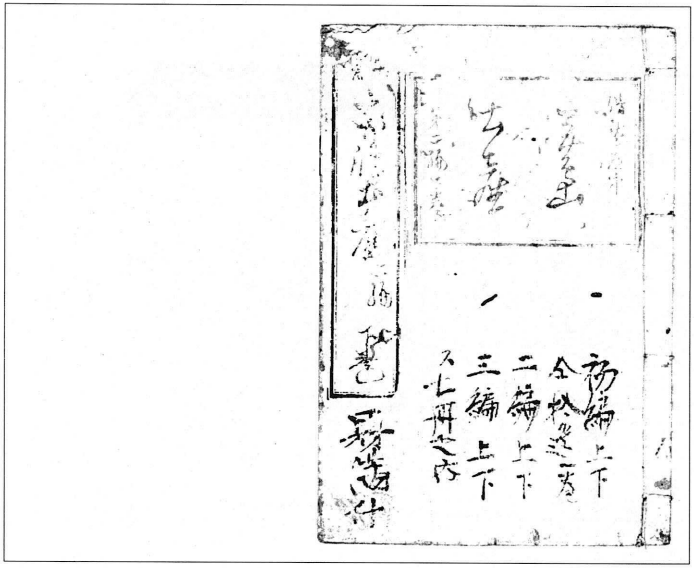


16 二編上附言

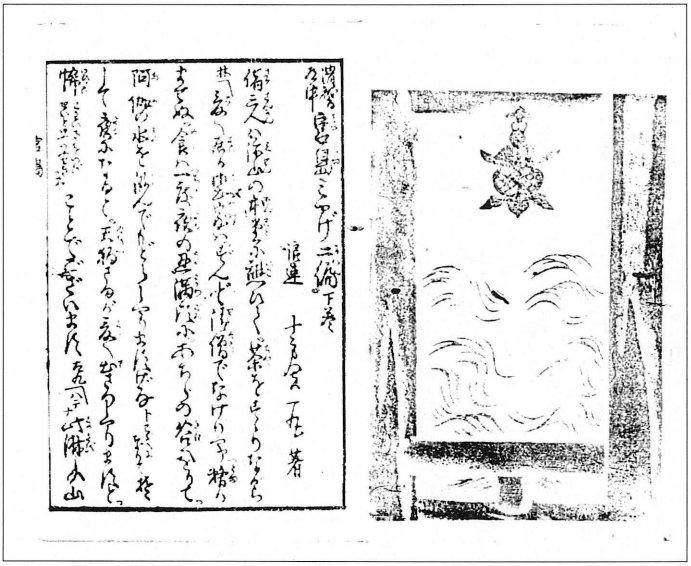


17 二編上末尾

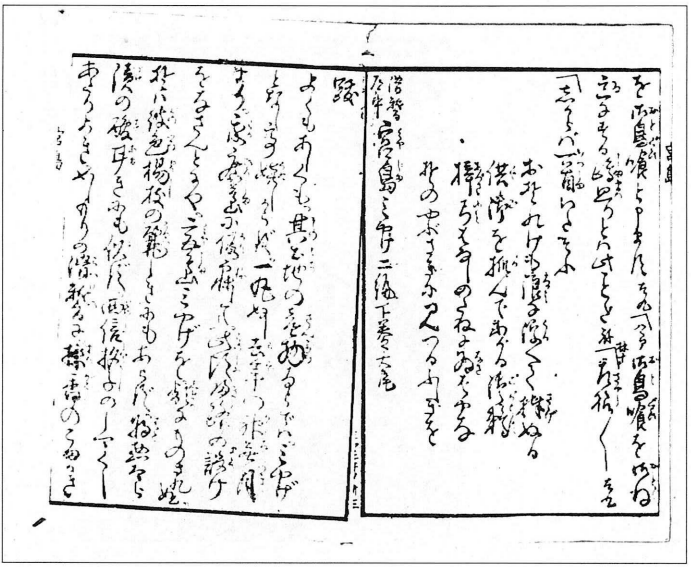
18 二編下表紙



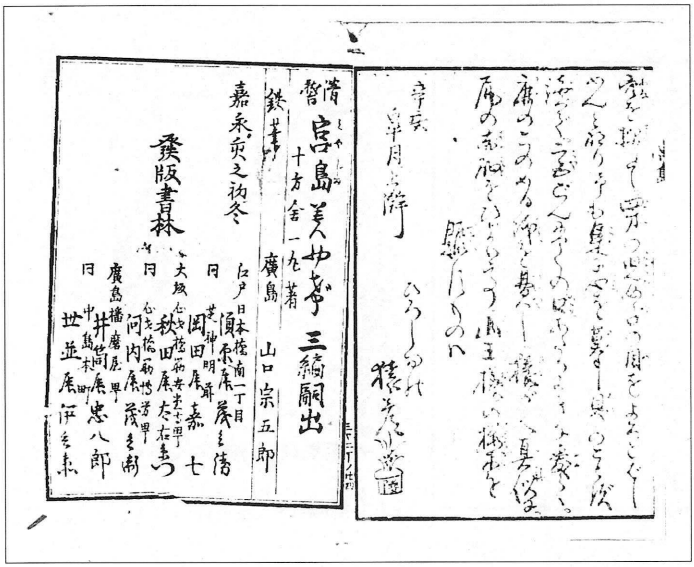
19 二編下見返し



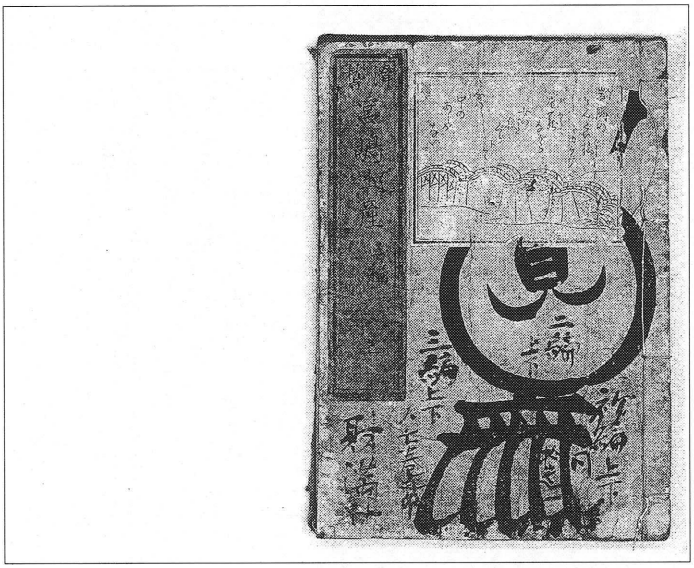
20 二編下跋



21 二編下刊記

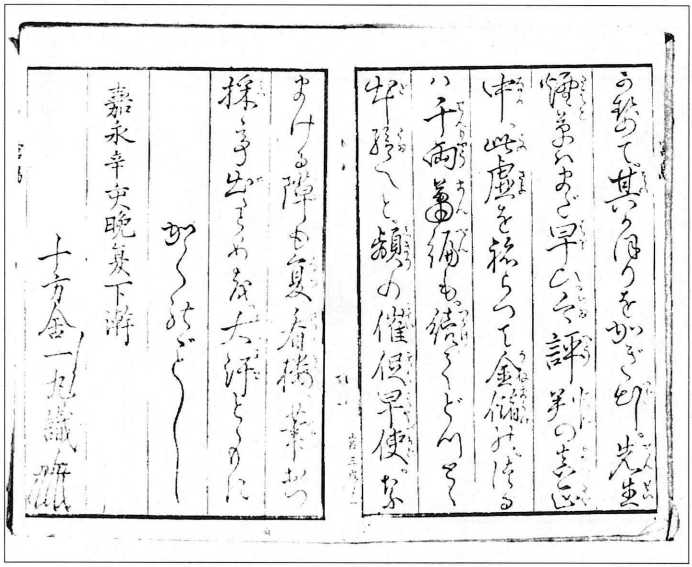


22 三編上表紙

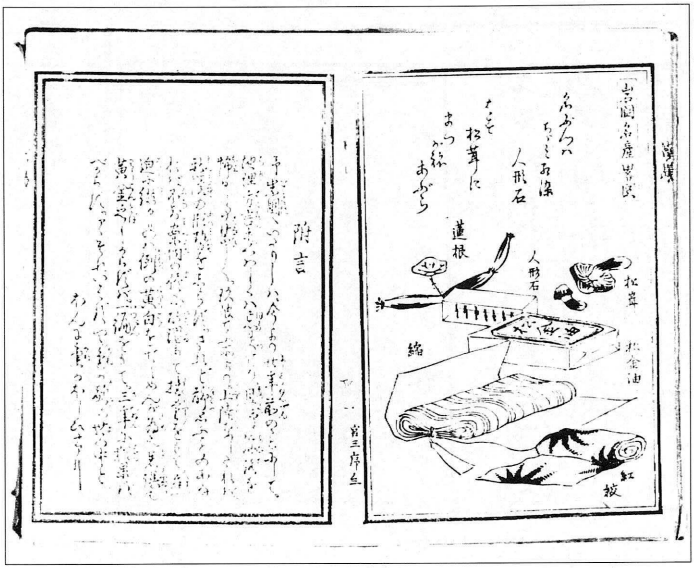


23 三編上見返し

24 三編上自序

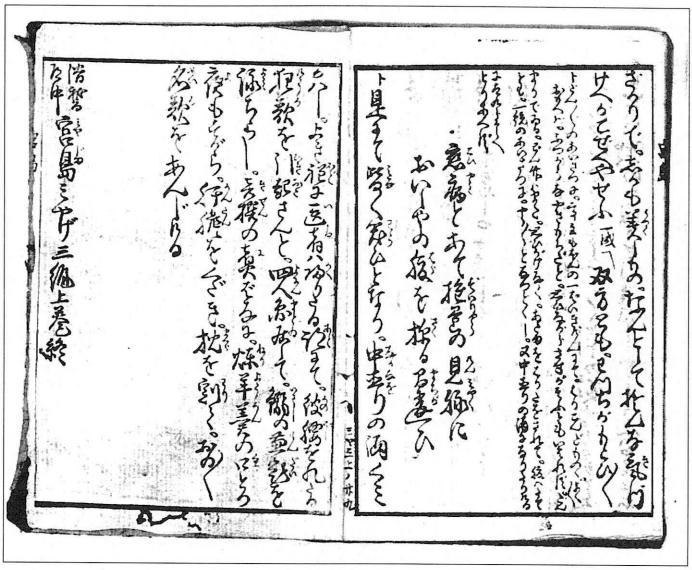


25 三編上附言

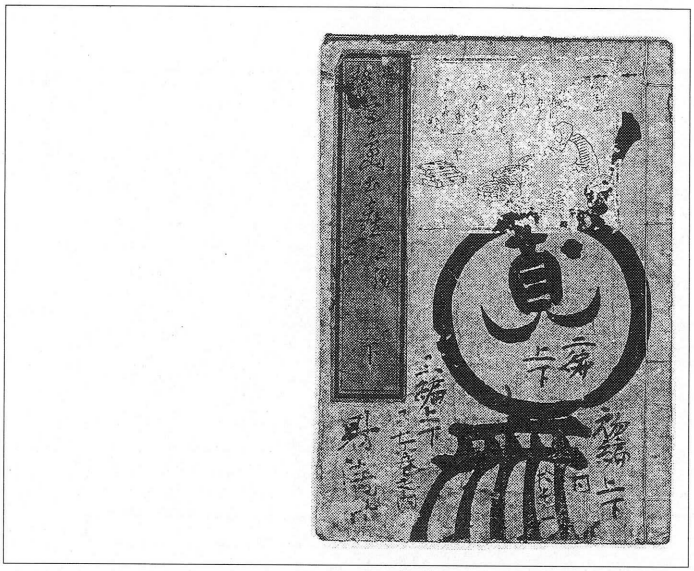


26 三編上冒頭

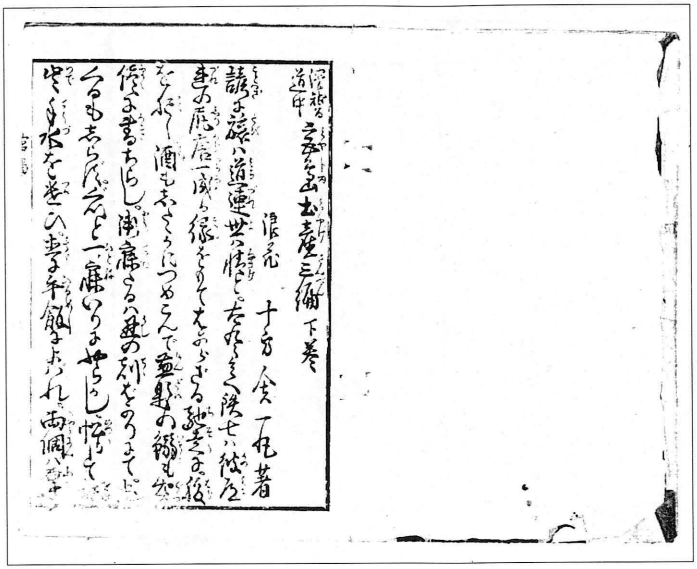
27 三編上末尾



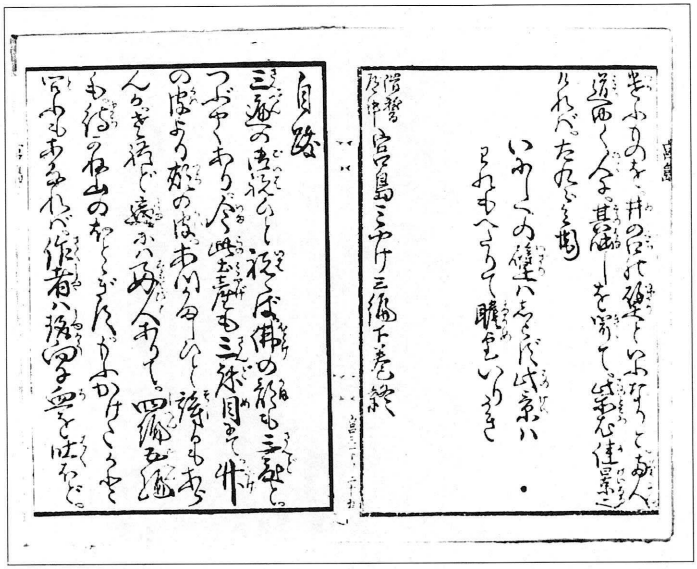
28 三編下表紙



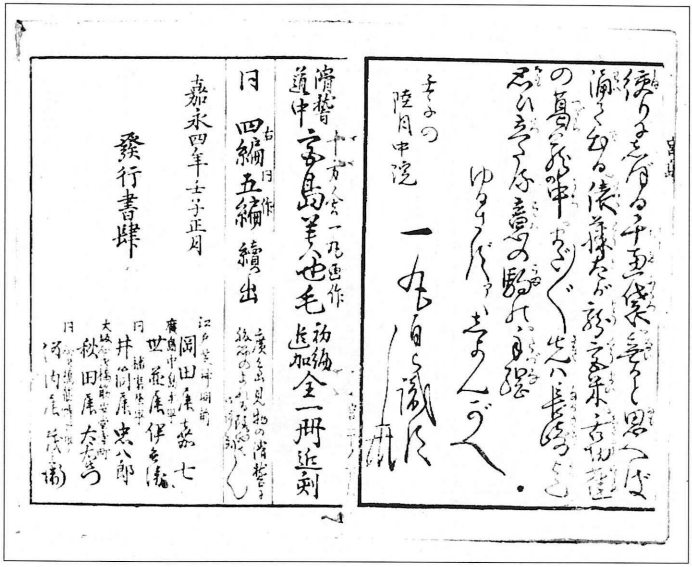
29 三編下冒頭



30 三編下自跋

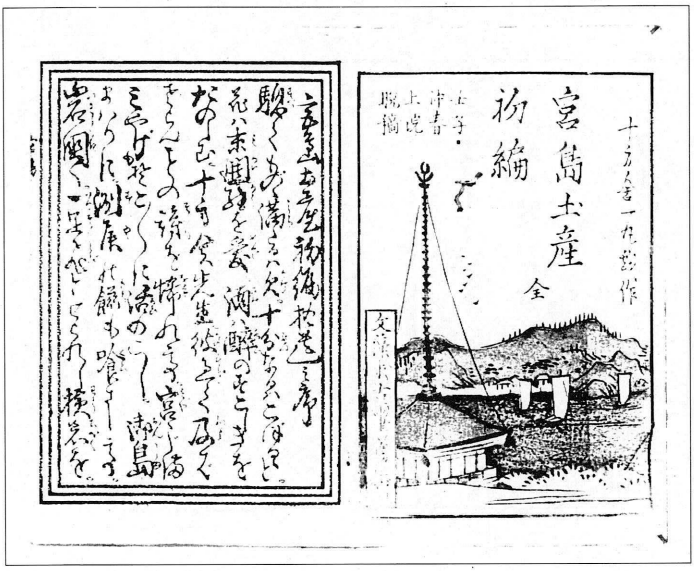


31 三編下刊記

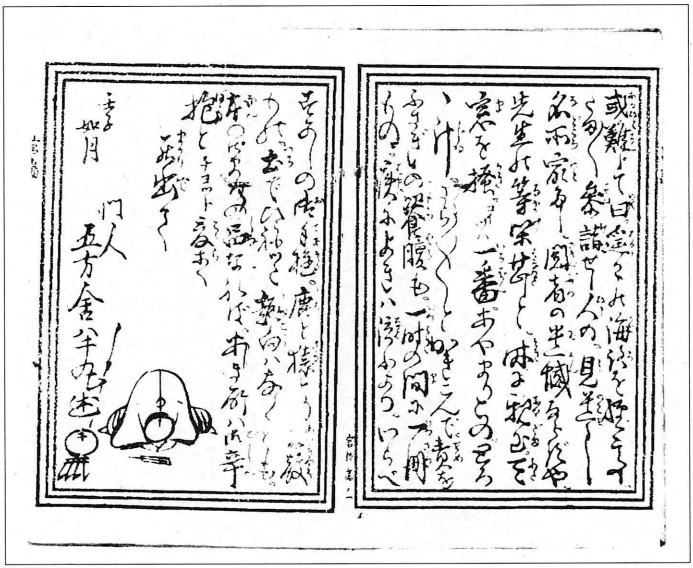


32 初編拾遺表紙

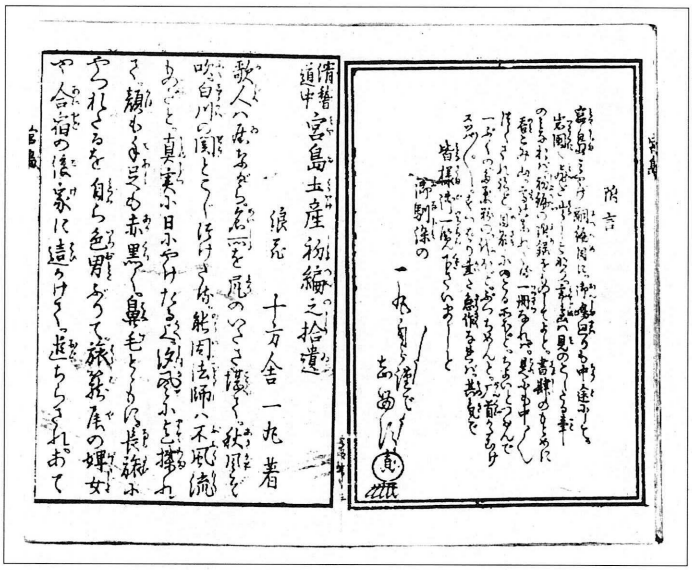
33 初編拾遺見返し



34 初編拾遺序



35 初編拾遺附言



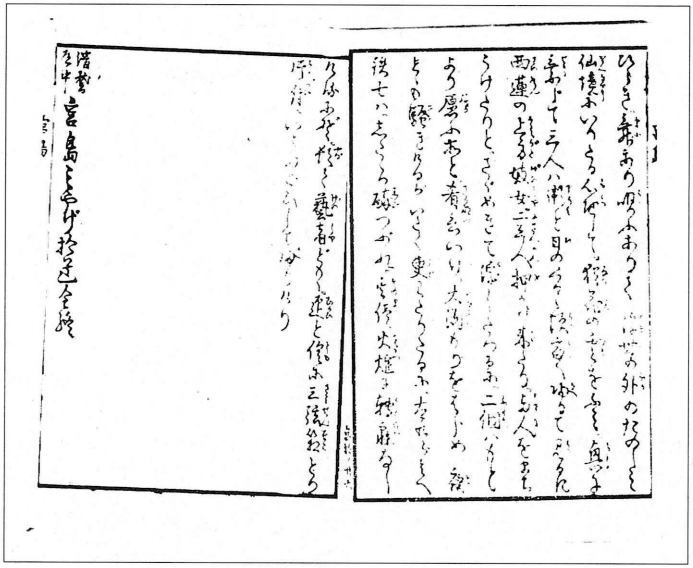
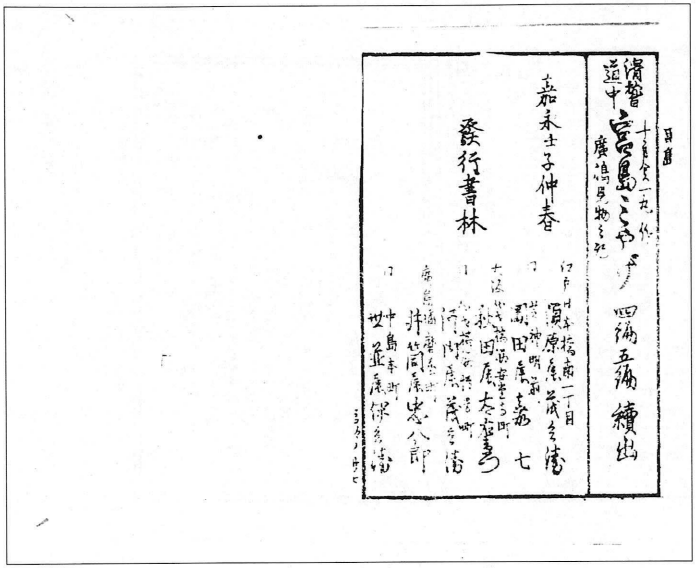
附言

宮島土産初編之拾遺

十万舎一丸著

歌人ハ歌ヨミ名所を尾のつさ撮く秋風を吹白川の関とゝ[illegible]能因法師ハ不風流ものゝと真実ハ日ハやけたる[illegible]ふと撫れく頬もよゝめ赤黒く鬼毛とゝの長旅ふやつれくるを自ら色男ぶりて旅籠屋の婢女や合宿の後に茶に這ひけゝ起ちられおて

36 初編拾遺末尾



37 初編拾遺刊記